毛

一般的に、南方に棲む動物の方が北方に棲む動物よりも、体の色が濃いと言われています。（これをグロージャーの法則といいます）

大森山動物園では、先頃までベンガルトラとアムールトラを展示していました。（残念ながらベンガルトラのマドンナは９月１４日に死亡してしまいました）

トラの体の模様は黄色地に黒色の縞ですが、注意深く観察された方は、暑い南の地域に棲むベンガルトラは寒い北の地域に棲むアムールトラに比べて黄色地が濃いことにお気づきになったと思います。

毛の濃い色は、太陽光線が皮膚に直接とどくのを防ぐ役割をしていると言われています。

逆に、極端に寒い地域に棲む動物は白い体色をしています。みなさんよくご存じのホッキョクグマや、大森山動物園でも飼育展示しているシロフクロウが、その例です。

さきほどウサギの話しをしましたが、東北地方に棲むトウホクノウサギは、夏は褐色で冬には白い毛に生え換わります。体色の変化は、外敵から身を守る保護色の役割をしているのはもちろんですが、寒い冬には太陽の光を効率良く吸収し、暑い夏には暑さから身を守る役割も果たしているのです。

呼吸

暑いときに、犬が大きく口を開けて舌をだらんと出して荒い息づかいでいる様子が見られます。吐き出す息（呼気といいます）の中には、水分が多量に含まれています。汗が蒸発するときに、熱を奪って体温を下げるお話をいたしましたが、これと同じ理由で、呼気中の水分が蒸発するときに熱を奪い体温を下げるのです。

私たちも、激しい運動の後には息づかいが荒くなりますが、それは酸素を体の中に積極的に取り込むのと同時に、運動により上昇した体温を下げる役割も果たしています。

動物園でも、暑さの苦手な動物であるトナカイやレッサーパンダなどは７月の気温が上がり始める頃から、息づかいが荒くなるのが観察されます。今年の猛暑で、８月１９日に雄のトナカイが熱中症で死亡してしまいました。

2 暑さを避ける行動

私たちは、暑いときに、日陰に入る、あるいは風通しの良い所で休むなどをしますが、動物も同じ行動をとります。

夏場は日に照らされて地面も熱くなりますが、シンリンオオカミは土を掘り下げて、ひんやりした土の上に身を横たえて体を冷やします。カンガルーでも同じ行動が見られます。

暑さを避ける行動によっても体温が下げられない動物もいますので、その場合はヒトの手で温度を下げてやらなければなりません。

扇風機

ふれあいランド内にいるウサギも暑さには強くありません。そこで動物園では、夏の間、写真のような大きな扇風機で風を送って、少しでも体温を下げるようにしています。

クーラー

レッサーパンダは、中国からネパールにかけての高山地帯に棲んでいて、暑さに極端に弱い動物です。気温が25℃を超える頃から辛そうにしていますが、さらに気温が高くなると、体温が上昇して熱中症で死亡することもあります。

レッサーパンダにとって高温多湿な日本の夏に外で過ごすことは困難です。そのため、多くの動物園では、屋外の展示場以外にも、写真のようにクーラーを備えた屋内展示場を備えています。

記録的な暑さが続いた今年の夏は、熱帯夜になることも多かったので、扇風機とクーラーが大活躍でした。